

価値形態論の形成

中尾訓生

はじめに

本稿ではマルクスの理論を特徴づけている労働価値説の性格を『経済学批判』（1859年）（岩波文庫・大内訳）の「1章、商品」の検討を通して明らかにしようとしている。

この検討は『批判』の「1章」の内容が『資本論』の「1章、商品」へどのように整理されていっているかという視角からなされている。

したがってこの検討は以下のような検討を予定する。

労働価値説の性格は『資本論』の「1章」ではマルクスはどんな問題を提起し、その問題にどのような解答をあたえているか、いいかえると何を対象とし、いかにしてそれを措定したのかをみることによって明らかにされるだろう。本稿はそのための前段である。

1

まず商品が分析の対象とされる。

それは人間の諸欲望の対象であり、生活資料であり、したがってそれは消費される。

この側面からそれは使用価値をもつとされる。この使用価値が実現されるためには交換されなければならない。

すなわちリンネルがリンネルとしての使用価値を実現するためには、それ

は他の生産物と交換されなければならない。

以上のことは誰でもが日常的に確認しているところである。

この日常的経験から経済学批判の叙述は、はじめられている。

I 交換価値はまず諸商品の交換比率としてあらわれる。A商品 x 量はB商品 y 量として、逆にB商品の所有者はその y 量をA商品 x 量としてあらわす。

この交換関係からマルクスはA商品、B商品ともにそれらの自然的な実存の仕方とはまったく無関係に、すなわちその多様な外観にもかかわらず、それらは「同じひとつの物」を表示していると把握した。そしてそれらは社会的生活の生産物であり、人間生命力の支出の結果であり、対象化された労働であるとしてこの「同じひとつの物」を社会的労働の体化物であると規定している。

そして彼は「1章」の以下の課題を「交換価値で表示される労働の一定の性格がいまや考察されなければならない。」(24頁)としている。

彼は「同じひとつの物」を把握したのと同じ仕方で諸商品に「ひとしく対象化されている労働はそれ自体、同じ形の、無差別な労働でなければならない。」として「交換価値を生み出す (setzende) 労働は抽象的一般的労働である。」と述べている。

要約すると、 $A \cdot x = B \cdot y$ が成立しているということは $A = B$ でなければならない。したがってA、BはX(「同じひとつの物」)に還元されるであろう。Aをつくる労働、Bをつくる労働、はそれぞれ相違しているが $A = B$ 、という関係からA、Bに対象化されている労働は無差別な労働でなければならない。

だからXを生み出す労働は抽象的一般的労働である。

次に交換価値の量的規定にうつり労働の量的定在は労働時間であるとしている。

だから、彼は x/y を決定するためにのみ労働時間を導入したわけではない。

彼が批判しなければならない経済学的諸範疇が量的規定を基軸に展開されているのである。ここで彼は批判のための準備を完了した。上述の課題は次のように提示される^①。「交換価値が労働時間によって規定されていることを理解するためにはつぎの重要な諸点をしっかりつかんでいなくてはならない。すなわち(1)諸労働の単純ないわば質をもたない労働への還元、(2)交換価値を生み出す、したがって商品を生産する労働が社会的労働であるための特殊な方式、(3)最後に使用価値に結実するかぎりでの労働と交換価値に結実するかぎりでの労働との区別、これである。」(26頁・番号は引用者)ここで彼が「……理解するためには」と述べて「……論証するためには」と述べていない点は注意をするに値する。

それは彼が「同じひとつの物」を把握した過程を示しているから。いいかえると「同じひとつの物」が「1章」ではたしている論理的位置を示してくれるであろう。

(1)は複雑労働の単純労働への還元である。これは労働時間によって交換比率が規定されるとした場合、まず問題になることである。

リカードの『原理』、第1章は交換比率が労働時間によって規定されていることを論証するためにあてられている。

そして1章、2節でこの問題をつかっている。

しかしマルクスはリカードが還元のメカニズムを論じているのとはちがって、ここでは還元を可能ならしめる背景、いいかえると還元が日々おこなわれていることを人々が無意識的に受け入れていることを指摘するために(1)をとりあげている。

(2)は(1)を承けて交換価値を措定する労働の諸条件について、「労働の無差別的な単純性とは、さまざまの個人の労働が同質であり、かれらの労働が同質なものとしてたがいに関連しあうということであって、しかもこの関連はあらゆる労働が同質な労働に事実上還元されることによっておこなわれているのである。

① 以下での「交換価値」とは「価値」のことである。『資本論』では明確にされているが『批判』では不明確である。

各個人の労働は交換価値で表示されるかぎり同質性というこの社会的な性格をもち、またあらゆる個人の労働にたいして同質なものとして関連させられるかぎりにおいてのみ、かれらの労働は交換価値で表示されるのである。」(28頁)と述べている。

この叙述は彼の社会認識——抽象力によって彼が視ることのできた社会構造——を示している。

この社会認識によって彼は $A \cdot x = B \cdot y$ の基礎(背景)には $A = B$ が存在することを視ることができたのである。

しかし彼の叙述は逆の印象をあたえるのであるが。

II 続けて彼は「個々人の労働時間が交換価値に結実する(resultieren)ためにはひとつの一般的等価物つまり個人の労働時間が一般的労働時間として表示されることに結実しなくてはならない。」(29頁)と述べて彼の対象とした社会で一般的等価物がはたす役割についてふれている。(一般的等価物とは任意に他の生産物の一定量と交換可能な生産物のことである。貨幣を指示している。)すなわち、リンネルや亜麻糸がその本来の使用価値を実現することができるかどうか、ということがそれらの生産に要した個々の労働時間が一般的労働時間として表示されるかどうか、として述べられている。

それは個々の労働時間が社会的必要労働時間として評価されるかどうか、ということとして、また個々の労働時間はある幅をもって調整されるという文脈において展開されている。一般的労働の体化物(一般的等価物)が総労働時間(私的労働時間の総計)を各部門へ配分するさいの信号の役割をはたすというのである。

これはヒルファディングが『金融資本論』の「1章、貨幣の必然性」で展開している論理の骨組である。

そしてマルクスは私的労働時間が社会的に承認されるこの形態を「労働が社会的性格をうけとるばあいの特異な形態」(29頁)としてその他の形態(例えば、自然発生的な分業形態)との比較もおこなっている。

マルクスのこの「対象とした社会」の歴史規定を、 $A \cdot x - X - B \cdot y$ 、
として示しておこう。ここで、Aは私的労働時間の体化物、Xは社会的労働
時間の体化物、あるいは一般的等価物に対象化された労働時間。

「1章、貨幣の必然性」はヒルファディングがみずから語っているように
マルクスを忠実に解釈したものである。

『批判』でのマルクスの説明からすればヒルファディングの解釈が誤りで
あると断定することはできないであろう。

Ⅲ ただマルクスは上述の歴史規定に続いて「交換価値を生みだす労働を
特徴づけるものは人と人との社会的関連がいわばあべこべに、いいかえると
物と物との社会関係として表示される点である。」と述べて、「あべこべ」に
なっている社会的関連を次のように説明している。

「一つの使用価値が交換価値として他の使用価値に関係するかぎりでのみ
異なる人々の労働は平等な、かつ一般的なものとして互に関係させられる。」
そして、この関連が「あべこべ」ではなくして自明のこととして人々に思わ
せているのは日常生活の習慣にほかならない。(31~32頁)この説明から日常
的な人と人との関係が何故、彼にあっては「あべこべ(仮象)」であるのかを
さぐらなければならない。

当然のことながら彼自身の想念に人と人とのあるべき結びつき——人間観
——があることが推察される。彼の人間観が前提されていないと人々が日常
的にとり結んでいる関係を「仮象」としてと見ることはできないであろう。

問題にしなければならないのは次の点であろう。

『批判』で展開されている論理の外側に彼の人間観があるのか、それとも
論理の内側にそれがあのか、いいかえると論理の展開そのものが人間観の
具体化であるのかどうか、という点である。

「一つの使用価値が交換価値として他の使用価値に関係する」というかた
ちで表示されたこの社会的関連を次のように示すことにする。

$$\frac{A \cdot x}{\quad} \quad \frac{B \cdot y}{\quad}$$

└── X ──┘

さて、この社会的関連を「仮象」と視たマルクスの眼を「(3)、使用価値に結実するかぎりでの労働と交換価値に結実するかぎりでの労働との区別、……」を検討することによってある程度解釈することができる。

さて、二つの労働について次のように述べている。

「交換価値を生み出す労働が一般的等価物としての諸商品の同質性のうちに実現されるのにたいして合目的な生産的活動としての労働は諸商品の使用価値の多様性のうちに実現される。交換価値を生み出す労働は抽象的一般的かつ同質な労働であるが、使用価値を生み出す労働は形態と素材のことなるにしたがって無限にことなった労働様式にわかれる具体的な特定の労働である。」(34頁)

労働という行為を二重—抽象的労働, 具体的労働,—の視点で考察している。

$\frac{A \cdot x}{X} \frac{B \cdot y}{X}$ はしたがって〔Aを生産した具体的労働〕は〔単純無差別な抽象労働〕の多少によって評価をあたえられる、ということである。(Xは一般的抽象的労働。)

Aはその使用価値においては直接には評価されない。生産者と財の使用価値との直接的な関係(意識)はここには存在しない。

したがって人は具体的な労働を通して結びついてはいない。

「仮象」であるゆえんはこの「仮象」を打ちやぶろうとする人間がいいかえると、その人間の可能性が、 $\frac{A \cdot x}{X} \frac{B \cdot y}{X}$ に措定されているからである。

注意すべきは、その同じ人間がまたこの「仮象」をかたちづくっているという点である。

具体的労働は人間と自然の素材転換というあらゆる社会形態を通ずる規定である。

人間は具体的労働——合目的的活動——のうちでのみその能力を開発・発揮してきたわけである。

これらの点については1843年のパリ草稿で情熱的に語られている^②。

以上、解釈してきた二様の歴史規定は『経済学批判要綱』でも、もちろんみられる。

$A \cdot x - X - B \cdot y$ で示される歴史規定はプルードン主義者やA・スミスの貨幣論の批判に。

$\frac{A \cdot x}{X} \frac{B \cdot y}{X}$ で示されるそれは、「人格的依存」,「物的依存」として表現されている歴史認識に照応している^③。

『批判』では続けてマルクスは、 $A \cdot x - X - B \cdot y$, $\frac{A \cdot x}{X} \frac{B \cdot y}{X}$ の形態を措定しようとしている。

IV (一) A商品の所有者甲はB商品を欲し, B商品の所有者乙はA商品を欲する。そこでA, Bは互に譲渡される。

(イ) $A \cdot x \rightleftharpoons B \cdot y$, である。

しかしながら「商品が交換されうるのはただ等価物としてだけであり, しかも商品が等価物であるのはただ対象化された労働時間のひとしい量としてだけであるから……特定の欲望にたいする関係についてのいっさいの顧慮はまったく消えさっている。」(45頁)

(ロ) $\frac{A \cdot x}{X} \frac{B \cdot y}{X}$ Xは一般的等価物。

マルクスは商品交換の内的構造を(イ)と(ロ)で示したのである。

そして(イ)と(ロ)の関連を説明する。

AとBが交換されるためには(イ)と(ロ)が同時にみたされなければならない。

(イ)のためには(ロ)が前提され, (ロ)のためには(イ)が前提されなければならない。

しかも, (イ)AとBの区別, (ロ)AとBの等置, これはたがいに排斥しあう関連にある。ここに「矛盾しあう諸要求の全体があらわれるのである。」(46頁)

そして彼はこれらの矛盾は交換過程で展開され解決されるとする。

抽象力によって構成された矛盾——商品交換の内的構造——は現実(交換

②「疎外された労働は)人間の類的存在を, すなわち自然をも人間の精神的な類的能力をも彼にとって疎遠な本質とし, 彼の個人的生存の手段としてしまう。……人間が自分の労働にたいする, 自分の労働の生産物にたいする, 自分自身にたいする関係について妥当することは, 人間が他の人間にたいする関係についても妥当する。」(岩波文庫, 『経済学・哲学草稿』98頁城塚訳)

③プルードン主義者の時間紙券論批判は48頁~60頁。スミスの貨幣論批判は91~92頁。歴史認識については79頁。『経済学批判要綱』(高木訳)

過程)で解決されると彼はする。

(2), 交換過程の内部で困難が解決されたものとする。^④

④ 交換過程の内部でゆきづまった困難とは、「商品はその交換価値として対象化された労働として表示されるためにはまえもって使用価値として譲渡され人の手にわたっていないなければならないのに商品の使用価値としての譲渡は逆に交換価値としてその定在を前提とする。」(46頁)ということ。「等置」と「区別」のことである。

さてマルクスは「解決された」ということを、 $A \cdot x = B \cdot y$ として表示する。

$$\begin{aligned}
 &= C \cdot z \\
 &\vdots \\
 &= H \cdot h
 \end{aligned}$$

$A \cdot x$ 量をそれぞれ提供することでB, C……Hのy, z …… h量が得られるというのである。

Aは一般的等価物, 対象化された一般的労働時間となっているわけであるが, B, C …… HもまたAの地位を得なければならないわけである。そうでなければB, C …… Hの所有者達は欲望を満足させることはできないであろう。しかしすべての商品が一般的等価物の地位を得ることはできない。

『資本論』での論理を念頭にしてみるとマルクスが最初に困難が解決されたといったのはA商品所有者にとってであることがわかる。

マルクスはまだA商品所有者にとっての解決が理論的にW—G—Wの措定であるとはしていない。

マルクスはまた次のような困難も指摘している。仮にすべての商品が一般的等価物としての地位を得たとすると, それは

$$\begin{array}{cccc}
 A \cdot x = B \cdot y & B \cdot y = A \cdot x & C \cdot y = A \cdot x & H \cdot h = A \cdot x \\
 = C \cdot z & = C \cdot z & = C \cdot z & = B \cdot y \\
 \vdots & \vdots & \vdots & \vdots \\
 = H \cdot h & = H \cdot h & = H \cdot h & = C \cdot z
 \end{array}$$

として表示されるが, A, B, C …… Hは対象化された一般的労働時間として交換過程にはいってゆくことになる。

しかし個人の労働時間が一般的労働時間として対象化することそのものが交換過程の産物である。(47~48頁)

以上でのマルクスが指摘している困難から次のようなことが推察される。

困難の解決が個別の商品所有者にとっての解決として強調されているために, すなわち $A \cdot x = B \cdot y$ の形態が, $B \cdot y = A \cdot x$ の形態への転換は

$$\begin{array}{cc}
 = C \cdot z & C \cdot z = \text{''} \\
 \vdots & \vdots \\
 = H \cdot h & H \cdot h = \text{''}
 \end{array}$$

A商品に対する欲望が他の商品所有者達の全員に存在したということによってなされている。いかかえるとマルクスの指摘している困難の解決はB, C …… Hの商品所有者達が現実にB, C …… Hを譲渡してAを得ることとされている。

すなわち「2ポンドのコーヒー=1エレのリンネル ($B \cdot y = A \cdot x$) はなおこれから実現されなければならない等置関係である。使用価値としての商品の譲渡は商品

したがって「すべての商品がその交換価値を特定の一商品ではかることによつてこの除外された一商品が交換価値の恰好な定在，一般的等価物としての定在となるのである。」(50頁)

それは $B \cdot y = A \cdot x$ として表示される

$$\begin{array}{l} C \cdot z = \text{〃} \\ \vdots \\ H \cdot h = \text{〃} \end{array}$$

(1)で構成された矛盾が交換過程で解決されたということは現実に存在している貨幣を概念化したということであつて貨幣の具体的・歴史的な形成過程を説明しているわけではない。「精神的に具体的なものとして再生産するための思惟にとつての様式にすぎない」のである^⑤。

『批判』の「1章」の理論展開はここまで後は、「A，商品分析の史的考察」が続いている。

さて形態が措定されたとするならば，それは， $A \cdot x - X - B \cdot y$ なのか，それとも， $\frac{A \cdot x}{X} \frac{B \cdot y}{X}$ ，であるのか。

Xを一般的労働時間の対象化されたものとしての展開であるから，措定された形態は， $A \cdot x - X - B \cdot y$ ，であるだろう。(註④を参照)

がひとつの欲望の対象であることを交換過程のなかで実証するかどうかにだけかかっているのであるが，この譲渡によつてはじめて商品はコーヒー(B)という定在からリンネル(A)という定在に現実に転化しこうして一般的等価物の形態をとり現実にほかのすべての商品にとつての交換価値となるのである。」(51頁，括弧のA，Bは引用者)

『資本論』では $A \cdot x = B \cdot y$ の形態から $B \cdot y = A \cdot x$ の形態への転換によつてB，C……Hに価格が付与されたということになるのであつてB，C……Hが現実にAを得るかどうかは問題とはしていない。

⑤ マルクスは経済学者達の貨幣把握の浅薄さを次のように述べている。

彼らは「商品は使用価値としては任意に分割できないが交換価値としては任意に分割できなければならない，あるいはAの商品はBにとつて使用価値であってもBの商品はAにとつては使用価値ではないかもしれない。」等々の困難をまぬかれる手段として巧みに考案されたものが貨幣だと主張する。

彼らによれば貨幣は単なる物質的用具である。(『批判』55～56頁)したがつて貨幣は談合によつて廃止することもできるということになる。

2

I 「1章」のいままでの解釈が日常的にみられる $A \cdot x = B \cdot y$ から $A = B$ をとらえ共通なるもの X を導出したところからはじまっているとしたら、有名なヴェームの蒸留法批判に接するとマルクスの理論の土台は危うくなるように私には思われる。

ヴェームは「マルクスはどのような方法によってすべての価値はもっぱら体化されたが労働量に依存するという彼の学説の基本命題に到達したのだろうか」と問題を提起し、 $A \cdot x = B \cdot y$ を分析して X を把握したマルクスの方法を検討して次のように結論づける。

「たしかにマルクスがその命題の真理であることを事実上真面目に確信していたことは疑いない。けれども彼の確信の根拠はその体系のなかに記述している根拠とはちがうところにある。それは実際のところ考えぬかれたうえでの結論というよりも信念であった。」そしてヴェームは続けて「それは権威からひきだされた信念であった。当時においては少くとも偉大な権威と信じられていたスミスとリカードはおなじ学説を説いていた。」(104頁)^⑥と述べている。

私はヴェームと同様にマルクスの X 把握についての叙述は極めて不十分であると思っている。ただマルクスはヴェームの述べているようにスミスやリカードから無批判的に X の実体を借用したわけではない。むしろそれはスミスやリカードの批判・克服の結果なのである。

この点をこそ X を把握した叙述のなかに位置づけることがマルクスを解釈するうえで重要であると考えている。

マルクスは「A、商品の分析のための史的考察」で「商品进行分析して二重

⑥ヴェームは『資本論』「1章、商品」での叙述にみられる X 把握の方法をとりあげて批判しているのであるがヴェームのとりあげ方は私が解釈した『批判』での $A \cdot x = B \cdot y$ を分析しての把握方法と差異はないのでここに引用した。

ただ私は『批判』と『資本論』ではその叙述の仕方は決定的な相違があると解釈している。

スウィーージー編『論争・マルクス経済学』所収ヴェーム・ベウエルク「KARL MARX and The Close of his System」(90~106頁)

の形態の労働に帰すること、つまり使用価値を現実の労働または合目的な生産活動に帰し、交換価値を労働時間または同質の社会的労働に帰することは、……古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的な成果である。」(57頁)と述べている。

先行する経済諸理論の分析を通して彼は労働の二重性を把握したと強調しているのである^⑦。すでに指摘しておいたようにXの把握には彼にとって社会認識が不可欠であった。

彼自身もこの点を十分に意識しているから「A、商品分析のための史的考察」を末尾に置いたと私は解釈している。

問題は叙述の方法としてそれが妥当であるかどうかである。

そこで以下、Xの把握に関する叙述について検討してみよう。

II 1857年のノート(経済学批判の序説)で彼は経済学批判の篇別をたてている^⑧。

また本稿で検討の対象としている『批判』の序言でも篇別について述べている。

確かめておかなければならないことは「一般的抽象的諸規定……」が『批判』では、のぞかれ(2)から叙述されていることである。

そこで(1)の位置づけを検討して経済学批判の叙述をはじめのさいの彼の間

⑦『批判』

$A \cdot x = B \cdot y \longrightarrow X \text{の把握} \longrightarrow A \cdot x - X - B \cdot y$

「A、……史的考察」 \longrightarrow

具体的労働
同質の社会的労働

 \longrightarrow 経済諸理論の非歴史性。

⑧「(1)一般的抽象的な諸規定、したがって多かれ少なかれすべての社会形態に通じるがそれも右に説明した意味である。

(2)ブルジョア社会の内部的仕組みをなした基本的な諸階級が存立する基礎となっている諸範疇の資本、賃労働、土地所有それら相互の関係……」(『経済学批判要綱』高木訳30頁)

『批判』の序言では、「わたくしはブルジョア経済の体制をつぎの順序で考察する。すなわち資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場。はじめの三項目では、わたくしは近代ブルジョア社会がわかれている三大階級の経済的生活諸条件を研究する。……資本をとりあつかう第1巻の第1部はつぎの諸章からなる。

(一) 商品 (二) 貨幣または単純流通 (三) 資本一般、そのはじめの2章が本書の内容をなしている。」(11頁)

題をさぐることにする。

彼はスミスやリカードが研究対象の歴史的制約について十分な認識をもっていないことを彼らの理論にみられる諸個人の行動様式を通して指摘している。

マルクスが経済学批判の叙述をはじめるとの問題は対象を歴史的に制約されたものとしていかにして措定するかということであった^⑨。

彼が「一般的抽象的諸規定」について述べているのはこの問題領域においてであった。

「生産を問題とするばあいにはいつでもある一定の社会的発展段階での生産——社会的な諸個人の生産を問題とするのである。」(『要綱』6頁)「生産のすべての時代にある種の標識が共通にあり共通の規定がある。生産一般は一つの抽象であるがしかしそれは共通なものを現実にくきださせ、固定させ、したがってわれわれに反復をまぬかれさせるかぎりでは道理のある抽象である。……生産一般に妥当する規定が分離されなければならないのは、まさに主体である人間と客体である自然とはどこでも同じだということからすでに生じる統一(Einheit)のために本質的な差別をわすれてはならないためである。」(『要綱』7頁)

まずマルクスは生産一般の規定でもって対象をとらえようとするとき対象の歴史的制約性が消えさり、対象を永遠的なものとみなす誤りに陥ると指摘している。

例えば「生産用具」、あるいは「蓄積された労働」を資本と規定することの誤りを指摘している。それでは対象を歴史的に制約されたものとしてとらえるにはどうすればよいか。

マルクスは次のように説明している。

「生産用具」あるいは「蓄積された労働」はあらゆる社会形態に通ずる規定であるが、この規定が獲得されたということ、それは歴史的結果である。

⑨『マルクスにおける科学と哲学』花崎暴平2章を参照。本稿はこれから多くの示唆をうけている。

例えば「労働一般」の規定は重商主義者も重農主義者もとらえることはできなかった。

スミスにいたってはじめて獲得することができたのである。

マルクスはそれを「労働のこの例が適切にしめすことは、もっとも抽象的な諸範疇でさえも——ほかならぬその抽象のゆえに——すべての時代にたいして妥当するにもかかわらず、しかもこの当の抽象という規定性の点ではやはりまぎれもなく歴史的諸関係の産物であるということ」(『要綱』27頁)と説明している。「労働一般」という規定、すべての社会形態に通ずる規定であるが、この規定を獲得したということは歴史的結果(産物)なのである。すなわち、これは研究者(マルクス)自身が対象化されなければならないということである。研究者が対象を把握しようとするさいに、すでに研究者の眼は特殊のエーテルにひたされていると彼は述べているのである。

先行する経済諸理論のうちにみられる対象の非歴史性にたいするマルクスの批判は二様であった。

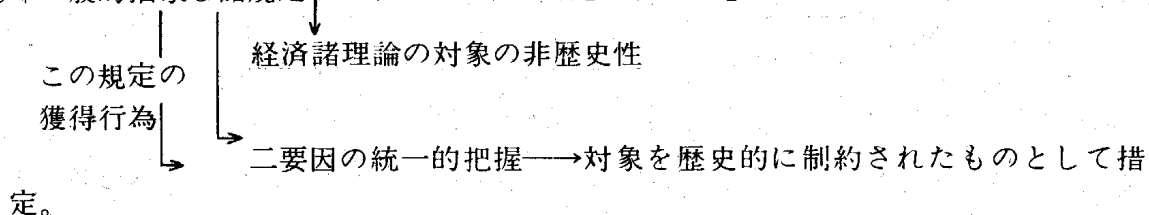
一つは、J・S・ミルのように「生産一般」の規定で対象をとらえる方法にたいする批判。

もう一つは、リカードのような「単純・無差別な労働」という完全に資本主義的な規定でもってのみ対象をとらえる方法にたいする批判。マルクスによればどちらの方法によっても歴史的に制約されたものとして対象をとらえることはできない。

ミルにとって対象は無色透明であり、リカードにとって対象は資本主義の陰憂な色によっへて染め上げられている。両者は共にそれ以外の色を視ることはできなかった。

対象を歴史的に制約されたものとして把握するためには「一般的規定」と

⑩「一般的抽象な諸規定……すべての社会形態に通ずる」



この規定を抽象したということ、これら二要因を統一的に操作しなければならない。

そのための(1)であり(2)であるだろう^⑩。

3

したがって『批判』「1章」は前述の問題意識を背景にして解釈されるべきであろう。

——「A……史的考察」では先行する諸理論を労働の二重性の視点から分析し、その非歴史性の原因が使用価値の面から考察するときは交換価値を形成する労働の特性を捨象し、逆の場合は逆であることによっていたところにあると指摘している。——

——また日常的に観察できる商品交換 ($A \cdot x = B \cdot y$) を分析して「同じひとつの物 (X)」を把握している。——

マルクスにあっては前者と後者の関連は明示的ではない。

私はこの関連を以下のように解釈する。

$A \cdot x = B \cdot y$ から X を把握したということは顕微鏡やピンセットを用いてなされたわけではない。

商品交換の拡大に照応して発展した経済的言語 (諸理論) を一定の視点の下に操作 (批判) してとりだしたのである。——ただここで、とりだされたのは商品に表示された労働の二重性であるが——マルクスはこれを後者と前者に分離して叙述したのである。

そのために後者の叙述は商品を極めて透明に把握できる印象をあたえることになっている。

したがって折角、抽象した X も対象を分析するための用具としての印象をあたえることになっている。

X 自身が対象であることを見落す危険性をあたえる。

前述 (→) の II) したように、 $A \cdot x - X - B \cdot y$ で示される歴史規定はマ

ルクスが対象とした社会で一般的等価物がはたす役割から得られたのであるが、これは同義反復であった。

対象を措定するために対象（私的所有に基づく分業）が前提としてあたえられていたのである。あるいは「私的所有に基づく分業」が歴史的事実の叙述としてあたえられたとするならば一般的等価物はその機能の面において把握されることになるであろう。

しかしこの歴史的事実の叙述による対象の措定は『要綱』で否定しているところである。

もしこの方法に拠るなら地代は最初に説かれるべきであると彼は述べている。

さて経済的言語（諸理論）の分析視点は『批判』までの彼の研究を跡づけることによって得られるであろうが、すでに指摘しておいた彼の人間観をそれとしておいてみると、 $A \cdot x - X - B \cdot y$ が措定されたとする解釈と適合しなくなる。むしろ形態を措定する展開では問題とされなかった、 $\frac{A \cdot x}{X} \frac{B \cdot y}{X}$ がその論点の延長線上にでてくる。

マルクスの古典派経済学批判は、いまみてきた二つの視点（形態）からなされている。

二つの形態は論理的に関連しているのかどうか、関連しているとしたらその構造は。

私はこれらのことを検討することはマルクスの理論を把握するために重要であり、これらは彼の理論を解釈するうえで有効な視角であると思っている。

『批判』「1章」は以上みてきたように、まだその叙述は整理されていない。^⑪

『資本論』「1章」ではその叙述はどのように整理されるであろうか。この点の検討は後の機会にゆずることにする。

